

資本主義を説く。図書館の開設を東京、京都市立图书馆がおもむかしく思ひ出を頃つてゐる。圖書が早速うなぐと、その本が出来て、喜んで一大事である。(昭和8年・中西靖忠)

中 西 靖 忠

はじめに

菊池寛(一八八六—一九四八)は大正八年(一九一九)から十一年(一九二二)末まで児童のための童話を書いた。発表の場となつたのは鈴木三重吉が大正七年にはじめた「赤い鳥」で、「赤い鳥」の運動に賛同したことになる。執筆が中断するのは、大正十二年一月号を以て創刊した「文芸春秋」の編集に専心したためで、児童のための物語。寛は大正七年に長女瑠美子を得、十二年には長男英樹が誕生している。十四年「小学童話読本」を編集するが、その序で「自分の子供が小学校になると同時に、彼等は蠶の如く讀物を貪り喰ふ」ことを發見したとある。驚きとともに自らの讀書体験を回想したのであろう。それで「俄然として小学児童の讀物の不備に気がついた」「健全にして甘美なる讀物を用意することの必要性を痛感」する。これはやがて十八冊を数える「小学生全集」編集へとつながる。また國定の國語教科書の批判をも、きびしく執拗に繰り返した。この児童への讀物、教育への関心と熱意は戦後になつても衰えることはなかつたと見受けられるのである。

かつて三重吉は「われわれ日本人は、西洋人と違つて、哀れにも殆

んど未だ嘗て、子供のために純麗な讀物を授ける、眞の藝術家の存在を誇り得た例がない」と嘆いた。以来六十余年、何人かの藝術家も出たし、戦後認識も変わつたが、世上一般では児童文学は片隅に押しやられたままである。その故か資料を求める点で不備を承知のまま、菊池寛の児童文学面での足跡を辿ることにする。寛もまた三重吉と同じ氣持で、児童のために努力してゐたようである。

菊池寛(一八八六—一九四八)は、大正七年に長女瑠美子を得、十二年には長男英樹が誕生している。最初の童話集、そして生前では唯一の、と思われる『赤い鳥』の本第

四冊・三人兄弟』(大正10・3)の序で「眞君夫人」お入出りす。——ある自分は少年時代に、お伽話を読み耽つた。……自分は、お伽話によつて、どれほど纖細な感情を養はれ、どれほど、奔放な空想を培はれたか知れない。もし、自分が少年時代にお伽話を読まなかつたら、今日の自分は今、自分とは全く別な人間になつて居ただらうと思ふ。

自分の如く、文芸を以て世に立つと云ふことは、それは特別な場合であるが、一般に文芸に親しむと云ふことは人生の幸福の一いつである。生涯文芸を解せざることは、人生の不幸である。……人生の眞の相、人生の眞の美しさ、眞の正しさに触れずして、一生を了ると云ふことである。さう云ふ意味に於て、幼年時代から文芸に対する趣味を養ふことは、他の如何なる教養とも比敵するほど、大切なことであると思ふ。その意味に於いて、

童話は正に文芸入門である。童話に於いて、美しき感情と、豊穣なる想像

と、正義を愛する心と、物の真実を観る眼とを培はれた児童達は、長ずるに及んで、必ずや文芸を愛する人となるだらうと思ふ。それは、彼等自身の幸福を意味し、同時に人類全体の向上をも意味して居る。

自分が、童話を書き、童話集を出す所以も亦、實にそれに外ならない。

甘文芸の功德を体験を踏まえて説き、文芸を愛することは自身の幸福になり、人類の向上につながるとは、『生活第一』を標榜した文学者寛らしい表現だ。一種の氣負いが見られるが、眞の人生を知ることの大切を努めて説得しようとしている。そして文芸入門である童話によつて養われるものは、『美しき感情』、『豊穣なる想像』、『正義を愛する心』、物の眞実を観る眼である。人生の眞の姿、美しさ、正しさを知ることが生き甲斐なのである。寛の文芸愛好の基本的思想といふべきもので、また童話創作の姿勢であることを明確に掲げたものである。寛が少年時代に親しんだ伽噺について具体的にあげてはいないが、昭和八年巖谷小波（一八七〇—一九三三）が死んだとき、「話の屑籠」に『僕達が少年時代には、たった一人の童話作家であった。『少年世界』に連載された「新八犬伝」などをどんなに耽讀したかわからない。小波山人が独逸行きのために、一時少年世界の主筆を江見水陰氏に托した事など、我々にとって一大事件であった。（昭和8・10『文芸春秋』）

と、思い出を誌している。讀書に早熟で、家が貧しかったから娯楽も少なかつたかも知れないが、兄が友人から借りてくる本を讀んだり、貸本屋を利用した。図書館の利用も東京、京都遊学時代はもちろん、

後年の習性のようになるが、高松市に初めて図書館が出来たとき、閲覧券第一号を手にして、中学の帰り毎日のように通つた。藏書の大半は讀んだといわれる逸話は有名である。とにかく少年時代に手当り次第讀んだ。眞の五つお爺はやつて、一歩きでるうはむわらうある。おじは

私は、尋常四年の頃、新聞の小説を讀んで恋と云う字の意義を知つてい

た。……高等小学校の三年頃には、『文芸俱楽部』を耽讀した。今の『中央公論』『改造』である。とは「半自叙伝」での回想である。その作家に、浪六渋柿園松葉奴の助や春廻屋おぼろなどの歴史小説をあげている。寛が歴史好きになり、身辺から史書を離さなかつたことも、このようにして養成されたのである。

大正九年、東西の毎日新聞に連載した「真珠夫人」は大当たりで、一躍流行作家になつた。そして十二年「だれにも気兼なしにものを言え」と合理的実行力、時勢を先取りする洞察力による斬新な編集ぶりで発展をつづけ、次第に文壇の「大御所」と言われるようになる。その頃自分の子供の讀書ぶりを見ていて、児童の讀物の大切さを痛感したとは前に触れたが、父親としてまた編集者としての目で、内外の児童讀物を見ていた。それは大正十四年、学年別に全八冊の「小学童話讀本」に結実する。興文社から出した僕の「小学童話讀本」は、此方も眞面目にやつたし、出

しかだ。誰に買って貰っても恥かしくない。新年早々自家広告ばかりして

甚だすまない。（大正15・1『話の肩籠』）

といったものなのである。この讀本には、

少年時代の讀物から受けた感激が、生涯を通じて感情生活の基調となり、

道念の芽となるかは、我々自身の争はれたき體験である。

というとともに、

児童に物を——自然を——人間を——人生を見る眼を与へたいと思ふ。

次に美しく優しく素直に感ずる心を与へたいと思ふ。最後に因はれずに正しく動く道念を与へたい。

と、『赤い鳥の本』の主張を広げ、深めた、編者としての見解を明らかにしている。よい童話とは右のような資質を養うものであり、寛は

この基準で童話を選択した。また引続き『小学生全集』の編集に当るに際し多くの助手が参加し、仕事を分担するが、多くは菊池寛

編として発表される。その作品採用の決定や指示や文章の手直しは寛の責任でなされたものの寛とその下請け代作と分ちがたくなって仕舞つた。しかしこれは紛れもなく寛の筆だと思われるのが存在する。例えば『日本偉人伝』中の「宮本武蔵」の項などである。創作の筆を絶つたとは思えないし、特に史伝的作品では自ら意欲的に書下すことでも多かったのではないかと思う。『小学童話讀本』にいう「自分の趣味と信念に依つて管理され」という發言は重く受けとられなければならない。

以上は寛が児童讀物について、あまりにも教育的、健全的な考え方

を持っているかを強調したように印象づける。正にその通りなのだが、

子供は面白くなれば、魅せられることができなければ、楽しく讀書に入することはない。寛はその児童文学の条件に「（健全にして）しかも甘美なる」（『小学童話讀本』）を付加えている。含みの多い滋味豊かな一語である。

中「半自叙伝」の中で

よく少年時代の苦労は、かまはない。晩年樂をすればなど云うが、しか

し少年時代に感覺も感情もフレッシュであるとき、面白いことをすれば、老いて多少苦勞をしてもいいのではないかとも考えられると思う。少年時

代に遂げられなかつた望みなどと云うものは、年が寄つてから償いようがないように思う。

と述べている。貧によつて樂しみを制限された少年時代の痛切な思い、これは消えることはない。寛はそれらの日に「甘美なる」讀物にめぐり会つた。この幸福をやはり頌ち与えたかつたのである。娯楽面の重視——のちに『日本児童文庫』と激しい宣伝合戦をする寛編集の『小学生全集』の一つの特色である。ともあれ、貧家に育つ子女への温い同情と、悦樂を与えていたいという願いは、寛の心情を貫く基本のものといつてよい。

### 「赤い鳥」の頃

○身の難 悪い人間 八半十良

○身の難 悪い人間 八半十良

○身の難 悪い人間 八半十良

れた鈴木三重吉（一八八二—一九三六）の『赤い鳥』は毎月巻頭に、「赤い鳥の標榜語」を掲げた。その一部が十二月号に到つて手直しされる。訂正の大きな眼目は当初、泉鏡花以下十三名だった『赤い鳥』の運動に賛同する作家名が九名ふえたことである。新たに小川未明、谷崎潤一郎、久米正雄、江口渙、有島武郎、秋田雨雀、西条八十、三木露風らとともに菊池寛の名が加わっている。そして寛が初めて児童のために書いた「一郎次、二郎次、三郎次」（後「三人兄弟」と改題）が『赤い鳥』の大正八年四月から六月まで連載される。

千年も昔の京都でのお話。二十里ばかり北の丹波の国のある村に三人の兄弟があつた。一つ違ひの仲よしで、他人からは見分けが付かないほどよく似ていた。都に行けば運が開けるだろと出発する。二日目の朝、大きな峠の頂上から都が見え、峠を駆け下りると、これまで一筋の道が三筋に別れていた。兄弟はそれぞれの道を選んで別れた。十年たつて、これら兄弟が再会したとき、檢非遣使の役人になつた左衛門尉清経、大盜賊の多能丸、加茂の長者となつており、裁きの場であった。三人は三様の運命にもてあそばれていた。別れ道での「たつた一足の違ひ」ありました。それがおしまひには、こんなひどい違ひになりました」物語である。

以後、『赤い鳥』には大正十二年一月号まで、『文芸春秋』創刊の時まで、次のように載せている。

### ○納豆合戦

— 落ちた雷 — 大正八年九月

○宮本武蔵と勇少年 九年三月

○艦長の子 九年六月

○狼と牡牛との戦 九年七月

○良い熊、悪い人間 九年十月

○一ぱいの水 十年二月

○唐人の算術 十年九月

○十三の頼朝

○八太郎の鷺

○そして大正十年三月には『赤い鳥』第四冊として『三人兄弟』が纏められる。それには○を付した作品のほかに、・甘美なる・難解なやうな不思議な話

○本当のロビンソン

○の二篇が巻首、巻尾に加えられている。

この第四冊というの、三重吉の『古事記物語』上下巻、西条八十の『鸚鵡と時計』（童謡集）に次ぐ出版で、『赤い鳥』に参加するこの遅れた寛としては、児童文学の面で他の誰よりも熱心に精力を集められたといえよう。また新たに加えられた二作は、『赤い鳥の本 第四冊』に単行本として纏めると企画が持ち上つて、大正九年末に急ぎ執筆したものと思われる。それは大正九年までの作品を収録して、不足する頁数を充す必要があったと思われるからである。

新たに書き下された二篇は共に二百年ほど昔、英國で起こつた実話に依つてゐる。「不思議な話」は、運命の偶然が重なつて無実の殺人

犯人とされ、絞首刑に処せられた男が処刑台で蘇り、海賊船に乗つてスペインとの戦いに参加する。その中で自分が殺したとされる男に遭遇つたり、奴隸にされたりの波乱にもてあそばれて二十一年目のさうらいの後、帰国した男の身上話である。「本当のロビンソン」は

皆さんは、ロビンソン・クルーソーのお話を聞きになつたことがあるでせう。が、あのお話は、英吉利のデフォウと云ふ小説家の作り話で、本当にあつたことではありません。が、ロビンソン・クルーソーの身の上によく似た水夫の話があります。

と書き出されるモデルの水夫アレキサンダーの話の紹介、解説の話である。束縛を嫌い、自由と夢を求めて無人島暮らしを志願した男の身上話で、「デフォウが、この本当のロビンソン・クルーソーと対面して話をしたか、どうかといふこと」「私達が最も知りたい神秘についても、些とも答えは与えられて居ません」と結んでいる。今でいうノンフィクションもので、外国の実話を少年向けて紹介して、運命の不思議さに思いを馳せ、知的好奇心をかきたてて、事実を探求することの面白さを、過不足なく書きこんでいる。当時として全く新しい、誰も試み得なかつた児童讀物を開拓した作品である。

そうしてみれば、大正九年以前の作品で省かれたのは一篇「落ちた雷」である。平安朝時代、京都のヘボ医者が落ちた雷をハリで治療する。「ハリは痛いものと、ききおよんだが……」と尻込みする鬼に「なんの、いたいものですか。人間さえへいきです」「あいたたた……」と大の雷が子供のように泣く。強いはずの雷とのユーモアたっぷりの

やりとりが面白い。百姓たちが水に困らぬようにすることを約束させ、ヘボ医者はやがて名医になるお伽話仕立てである。年少者の喜ぶ話であり、現実味ある他の作品との統一という点から切り捨てたものと思われる。

「皆さん、あなた方は、納豆壳の声を、聞いたことがありますか」で始まる「納豆合戦」、北海道開拓初期の牧場で目撃した動物の戦いの聞書「狼と牡牛との戦い」は現代に取材したといつていい。残り六篇は歴史上のことか、昔あつた事實を材料にしている。「宮本武蔵と勇少年」の少年は後に吉川英治の「宮本武蔵」に登場する弟子三沢伊織となり、生彩を添えるのだが、寛のこの作品を承けて発展させたものであろう。「艦長の子」はナポレオンがエジプト侵攻を始めた英仏戦争中、地中海アブキール港で健気に戦つたフランスの少年の話である。英仏の話三篇、動物を主人公とした二篇、現代、歴史もの各二篇と平衡のとれた配列となっている。

寛のこの期の児童向け作品は、少年にやさしく語りかける形式が多い。簡潔で歯切れのよい文体である。それは人生の不思議、少年の進取と冒険、不屈な健気さ勇気についてであり、知的な好奇心をいやが上にも刺激するものであった。それはまたほのかに教育的意図を藏している。

その例を二、三あげておこう。

「狼と牡牛との戦い」私は「白」の勇ましい戦ひ振りにも感心しましたが、盲目でありますながら、連を助けて奮闘した不具の狼にも感心

しました。そして、戦に負けて、トボトボと退却してゐる後姿を見ると、戦に負けた人間の勇士を見るのと同じやうに、一寸可哀さうな気がせぬでもありませんでした。

「宮本武蔵と勇少年」昔の少年は十二や十三でも驚くほど心がしつかりしてゐて、大胆で勇氣があつたやうです。もつとも今の少年の方が、昔より学問もあり、恥巧であるかも知れませんが、恥巧で学問がよく出来ても、心がしつかりしてゐて勇氣がなければ、えらい人間にはなれません。

神様や仏様に「お金が出来るやうに」とか、「長生きが出来るやうに」とか頼むのは、物事の分からぬお爺さんやお婆さんのすることで、私達は宮本武蔵と同じやうに、神様は尊んでも、頼まずに自分のことは自分でやらなければならぬと思ひます。

「艦長の子」…が、このアブキールの海戦で一番勇ましかつたのは、誰でせうか、一番偉かつたのは誰でせうか。それは戦に勝つたネルソン提督でもなく、英吉利の兵士でもなく、父親の体を、死ぬまで守つてゐたあのフランスの少年ではないでせうか、あの十歳にしかならない艦長の子ではないでせうか。

「納豆合戦」は寛は納豆売りの声は聞いても、あの稻葉に包んだ納豆菌でねばる納豆を食べたことはなかつたのではないか。鉄砲丸のよう投げて戦ごっこをするなど出来ない相談である。悪戯大将に教えられて盲目のお婆さんから、二銭の苞を一銭でだましとる。いたずらとしては面白い。巡査に捕つたあと、反省して、お婆さんに親切にす

る“私”的話で、

：私がまだ小学校へ行つてゐた頃に、納豆壳のお婆さんに、いたづらをしたことを思ひ出します。それを思ひ出す度に、私は恥しいと思ひます。悪いことをしたもんだと後悔します。私は、今そのお話をしようと思ひます。

という告白から始まる。子供にとって告白は勇氣のいるもので、仲々むずかしいことだ。寛は高等学校二年生のとき、悪友とマイナスと稱して集団で万引遊びをして、その獲物の高を競つた経験があり、「半自叙伝」で告白しているのだが、その時の罰の影響、恐ろしさと周囲から侮蔑の目で見られる屈辱感は身にしみていた。その気持ちがこの作品に投影されていて、読者の子供らのおのずからなる共感をそそるものがある。

以上の点から寛の児童向け作品は、寛の讀書を含めての経験から感動したり、興味を覚えた事柄を年少者に引継ぎたいという自発的なものが多々、面白くお話を作つて子供を楽しませようという意図は稀薄である。眞面目であり、理智的であり、その中に滋味を持たず、つまり寛の人間味をさらけ出したものである。いざれもどちらかといえば男児対象の題材である。『赤い鳥 第四冊』に収録された後に続く作品でも、その基本線は変わらない。

「一ぱいの水」は紀元前十一世紀のイスラエルの第二代の王・ディビッドの事蹟を語つてゐる。羊飼いから非常に剛胆さが気に入られて王女の婿に迎えられ、人望が彼に集まる。妬んだ王は荒野に追放の刑に處す。立派な詩人でもあるディビットは石ばかりの丘で豊饒を彈き

ながら謡う。

先口に禍を絶ち渡さります。次に、この青草の裡は、遙の響和る聲

寸分の非を語らず、青草の裡を舞ひます。青草の裡を舞ひます。

曲れるを拒け、正しきを行ひ

常に平和を追ひ求める人々であれ

酷熱の荒野にあって夢にみるのは、こんこんと湧く水である。部下の

三人の勇者が決死の働きで水を運んでくる。ディビッドは一度は口にしようとした欲を抑えて「お前がたの貴い血も同じ水、すべての人々を守って下さる天の神に捧げるべきだ」と三人の目前で地面に捧げてしまふ。ディビット王の平和への願いとエゴを越えて人々を思いやる心の尊さが胸を打つ。

「唐人の算術」は少年と「算術って不思議なものだ」と語りあっているうちに、平安時代の俊平朝臣の弟某のことを思い出して語る構成になつてゐる。九州で賢い唐の学者に算術を習つた某は、さらに奥儀を極めようと唐へ渡る約束をして、ひとまず京に帰つてくる。京ではその学がもてはやされ、一方で異国で暮らす不安や渡海の困難など思ひ、ずるずる京に留まつて、信義を踏みにじる結果になる。それで唐人の算術のせいか、某は白痴のような容子に変身し、妙な入道になつて余世を過ごしたという話。

「十三の頼朝」は平治物語からの翻案で、平家に敗れて父義朝と東国へ逃れる苦難の旅を二回に連載、十三歳の時点で、この辺でお話を止めましょうと要領よく締めくくっている。「八太郎の鷲」は、北海

道が舞台、傷ついた鷲を助けて山に帰した八太郎少年が、激流でサケ釣りをしていて流される。巨大な滝が迫つてくる。あわや滝壺に落ちるという寸前、大鷲が舞い下りてくる。八太郎は鷲の脚につかまり、落差によつて下流に降りて助けられる。鷲は愛情を傾けた八太郎を常に見詰めていたのだろうか、危急を救つて恩を返した物語である。

『赤い鳥』には当時文豪とされた多くの作家が執筆した。島崎藤村（大7・7—12・8）、「二人の兄弟」「小さな土産話」「コケッコー」「玩具は野にも畠にも」「お弁当」「虫のはなし」）芥川龍之介（大

7・7—10・2、「蜘蛛の糸」「犬と笛」「魔術」「杜子春」「アグニの神」）有島武郎（大9・8、「一房の葡萄」）久米正雄（大8・1—10・9）小島政二郎（大7・7—10・6）その他だが、いずれも

個性ある作風で、多彩であったといえる。その中でも寛の作品は内外の史実や記録に即し、かつ未来に伸びる少年を意識した異色の存在だつたといえそうである。「やせ牛」「カナオレ」「ナナ」「ネヌシ」

### 本の「小学童話讀本」の編集

年代を追うとすれば、ここで『小学童話讀本』に触れなければならぬ。昭和二年『小学生全集』の発行で、アルスの『日本児童文庫』と激しい宣伝合戦となり、アルスは告訴にまで持ち込むのだが、菊池寛を支えた自信・自負は、二年近き歳月をかけたこの『讀本』編集に基づくものであり、先にも触れたように、児童讀物の見直しのきっかけ

となつたのは「私の子供」であり、私の子供のために取捨選択したものの、という点で重要な意義を持つ。一部の重複を嫌わず検討したい。しかし私は以下のところ、その実物を手にすることが出来ずにはいる。資料としては『小学生全集第四十卷・太閤記物語』（昭和三年八月一日発行）の巻末に、「小学童話讀本に就て」という『小学生全集』の、姉妹篇として推奨する廣告文に頼ることにする。

『小学童話讀本』は学年別に童話を配分編集したもので、上級の五、六年生が上下二巻となり計八冊である。

大正十四年九月に五年生上下、六年生上下が発行され、翌十月には一年生、二年生、三年生、四年生と逐次発行された。発行先は興文社である。寛はいっている。

私は昨年来私の子供の為に日本及び外国のあらゆる童話的讀物を涉獵し、私の信念に従つて取捨選択したが、偶々興文社の依嘱に会し、全八冊に分つて出版することにした。

私家版ということである。自分の子供（長女瑠美子七才、小学二年、長男英樹二才）のため一家の庭の訓ともするべく、内外の讀物から信念に従つて選択したものを公刊するということで、販売上の宣伝味が加えられているとして割引しても、並々ならぬことである。更に念を押して

児童の心はしばしば教室の窓を通して、青草の野を慕つてゐる。私の小学童話讀本も青草の野でありたい。だが、この青草の野は、私の趣味と信念に依つて管理され、児童を誘惑する未熟の黒樹や毒草は一本一草もない

苦である。

果たして評判は良かつたようで、この廣告に各新聞の書評を引用している。大阪毎日「日本に初めて出現した理想的な小学副讀本」報知「この童話讀本の出現は単に小学児童一、第二の、国民一に取つて、幸福なるのみならず、全国民の、全國家の、全家庭の福音である」大阪朝日「編纂の親切、周到正確、正に吃驚に価する」東京日日「副讀本の白眉」等々である。

内容として目次が掲載されており、一学年は「コドモ サン タチニーアサ」から始まり、「ウサギ」「ヒナドリ」「ヤギ」「ネズミ」「カラス」「キツツキ」「サル」「キツネ」……と鳥、小動物、虫を主人公にしているのが目立つ。「スナノヤマ」「ツキアツテナラナイトモダチ」という項目もある。以上二十三篇、本文九十四頁、定価八十銭である。

二学年目次は「父母」「新入生」「七人のばか」「正直な娘」「わるいくせ」「けちん坊と金」「おしゃべり」と人間が出てくることが多くなる。社会的な教訓を盛り込んでいふと思われる。「どちらになつた子ねずみ」「おもちゃの舟」「機関車」「せかい中の海が」という題目が見える。「おほかみと七匹の子小羊」はこの巻、二十一篇、百二十頁である。

三学年は「むちのはうび」に始まり「世界の誕生」が末尾で「アラビア人とらくだ」「船と水先案内」があり、目を世界に広げたかのように思われる。「お山の大将」「沢庵つける沢庵」「まがりくねつた

男」などどんな話なのであろうか。「さびしい旅人」があり「花びらの旅」は浜田広介の作であろう。二十篇。

四学年には「ダビデとゴライアス」「ホラチウス」「アンドロクルスと獅子」「牛のピーター」などの歐州の神話や聖書の話が見られる。

この巻末の「良い熊悪い人間」は『赤い鳥』(大9・10)に載せた寛の作品である。すれば冒頭の「雷落」はこれも寛の作で『赤い鳥』大正八年十二月の「落ちた雷」の改題ではあるまいか。以上十七篇百卅頁で、三、四年生の定価は九十銭である。

五学年からは全目次を掲げておく。作者が分かると書き加える便宜のためである。頁数は一四〇—一五〇頁になり、定価はいずれも一円である。

— 五学年上巻、二十一篇 —

「丁抹兵の話」

「ももんがあ」

「艦長の子」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「兎と猾」

「アントニオ・カノバ」

「犬の友情」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「奴さん」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「馬の話」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「領主と鼻」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「不思議な瓜」

「主人と雇人」

「木の葉の小判」

「鉄砲の祖先」

「銀百枚」

「三つの謎」

（久保田万太郎『赤い鳥』大12・3）

「驢馬と日影」

「三人兄弟」

（寛『赤い鳥』大8・4～6）

「お話の本の国」

「成吉思汗 鷹」

「大伴部の博麻」

「ロムパルディの少年斥候」（寛 初出？のち「小学生全集」）

「笛」

（小島政二郎『赤い鳥』大8・10）

「乞食の騎士」

「聖徳太子」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「砥石廻し」

「いばとり鳥」

「孤と虎」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「宮本武蔵と勇少年」（寛『赤い鳥』大9・3）

「デイモンとピンアス」（三重吉『赤い鳥』大9・11）

「鯉」

（寛『赤い鳥』大9・6）

「ふくろと子供」

「地下の大火」

「栗鼠の働き」

「『焼肉さん』おやすみ」

「あわれにやさしい話」

「忠実な番人」

「老水先案内」

「蜘蛛の糸」

「耳切れ團市」

「少年筆耕」

(龍之介『赤い鳥』大7・7)

「驢馬と批評」

「脳の重さ」

(小説西二浦『春の鳥』大8・01)

「不思議な話」

(寛『赤い鳥の本・三人兄弟』大10・3)

「指紋の話」

(アンナベル・リイ) (寛『春の鳥』大8・01)

「法螺男爵の話」

(寛『春の鳥』大8・01)

「難破船」

(寛初出?『日本童話名作選集』昭24・12)

(俊寛) (寛『春の鳥』大8・01)

「偽孝行」

(寛『春の鳥』大8・01)

「リンカロンと農夫の子供」

(寛『春の鳥』大8・01)

「少年の血」

(久保田ひ太郎『春の鳥』大81・8)

「人間以上」

(寛改題『わが母いすこ』?)

「母を尋ねて三千里」

(寛改題『わが母いすこ』?)

「屋上の狂人」

(寛『新思潮』大5・5)

「影と幸運」

(寛『新思潮』大5・5)

「少年鼓手」

(時計の話) (寛『春の鳥』大8・01)

「中尉と下男」 (寛『春の鳥』大8・01)

「搖籃の唄の思ひ出」 (宇野浩二)

「イワンの馬鹿」

(母は國)

(六学年下巻、十四篇)

(六学年上巻、十五篇)

(寛『春の鳥』大9・7)

「脳の重さ」や「指紋の話」はどのような内容なのだろうか。寛が子供の科学知識に対しても、すでに考慮していたことが読みとれる。だから『日本児童文庫』のアルス側が、『小学生全集』は企画を盗んだとして告訴したとき寛が激怒したというのも、もつともなことである。

### 『小学生全集』の編集

#### （一）子供に「二つの春」が

大正十五年（一九二六）十一月、改造社の『現代日本文学全集』出版がきっかけになって円本ブームが起つた。大量の予約を取ることによって、全集ものを廉く販布しようという企画で児童書出版界もこの波に巻き込まれた。昭和二年（一九二七）三月、時を同じく出版企画が発表される、アルス社の『日本児童文庫』全七〇巻（最終七十六冊、二冊一円）、興文社・文芸春秋社の『小学生全集』全八〇巻（最終八十八冊、一冊三十五銭）の対立・抗争はすさまじかった。予約獲得に激しい宣伝合戦を演じ、告訴沙汰まで起つる。菊池寛は『小学生全集』の編集責任者であり、企画・宣伝などすべてを采配した。

アルスは北原白秋（一八八五—一九四三）の弟鉄雄の経営する出版社で、『赤い鳥』で童謡指導に当つている白秋、同じく児童自由画運動で知られ、かつ白秋の義弟の山本鼎の兄弟を主軸に進められた。新聞への広告は両者ともなぜか同日の三月二十七日になされた。同じ頁を二分してである。『日本児童文庫』を白ヌキの大カットに一〇

二字の声明文と華麗燐爛を極むる美本の説明六八字、貰冊壹圓だけで冊数も挙げぬ簡潔さ。『小学全集』はカットなしの活字だけ、全八〇巻四六版四百頁、定価金參拾五錢の左右に線を引いただけ。菊池寛と芥川龍之介の名を並べて編集者を打ち出して、以下説明が八項目あり、「詳細は近日発表す」とある。東京日日は上に「小学生全集」を置き、下半分を「日本児童文庫」が占め、東京朝日は、これを逆に置いている。

両者の広告で共通しているのは、『文庫』が「大人は今や一円日本の流行に食傷してゐる。而も児童は空しく飢えてゐる。」と云い、『全集』が「今こそ少年少女諸君のための全集が出版せられるべき時である。大量生産、廉価販売の利益から少年少女諸君を除外してはならない」という訴えである。『文庫』は「現代第一流の芸術家、学者、教育家に懇請し、満天下一千万の児童の為に近く信頼すべき一大文庫を提供」と声明、『全集』は「日本及び外国のあらゆる童話、少年小女文学、歴史談、冒險譚、面白い科学談、各科の参考書類を蒐めて、茲に完璧の八十巻」とうたう。児童にとっては家庭に文庫が、図書館が出来るわけで、画期的な企画である。アルスは、その翌日、全頁の広告を出す。「模範的児童図書館の出現!!」「日本の子供に春が来た!!」全くその通りの朗報であった。

児童のための讀物集大成となれば、構想、内容は重なりあう、似通つたものになる。片や七〇巻、他が八〇巻と大部の企画で、どちらを取るか、一般にはその特徴が把えにくい。宣伝合戦は当然の帰結であ

つた。予約締切は『文庫』が六月三日（十七日まで延ばされる）『全集』が六月十五日になる。三、四月はまず平穏に過ぎるが、五月に入ると俄然白熱してくる。顧問や推薦者の地位や名声によつて信用づけようとの引込み争い、企画を盗んだとか計画の先後を疑う中傷、付録景品に適不適、宣伝のために少年少女を集める催し、販売競争は当然、地方教育界にも及び、無用の波紋を投げかけた。遂には五月二十日アルスは告訴するに到るなど苦々しい泥合戦を開戦する。結果両者ともに失つた方が多かったのではないか。当時の新聞のコラムに円日本ブームを諷して、

興文社とアルス、改造社（註）現代日本文学全集）と春陽堂（註）明治・大正文学大全集）の喧嘩、何かならぬとしても、せめて広告にはなる、とあるぐらいである。

## （二）日本児童文庫と比較

### 『文庫』

発行所 アルス（北原鉄夫） 興文社（石川寅吉）文芸春秋（菊池寛）

体裁 四六判、二五〇頁、五 菊判、二七〇頁、三十五錢  
十錢

童謡 白秋「日本童謡新集」

西条八十編で初級・上級の一冊と兼常子半代子「日本童謡語」選で清佐「音楽の話と唱歌集」

宣伝の 最良のコットン紙使用、 日本一の面白い良い美しい安い。完璧、ポイント驚くような美本。『童謡』わずかに三十五錢、永久に家庭の重宝。

模範的児童図書館、 童話讀本で好評の菊池寛、作家中第一

太陽の如く輝く各方面の博学の芥川龍之介両先生の責任編集  
『文庫』の権威三十三博士五十

余大家が執筆、比類なき顧問と著者「赤い鳥」を利用し教員「文芸春秋」一月号18万5千部印刷の販売組織「赤い鳥」層へ贈りあらす。 読者層

童話 日本お伽噺（小波）

幼年童話以下日本歴史童話まで二十一

冊、すべて寛の編著。中に建国神話

金田一京助ら

の八十九を

昔話上下（柳田国男）、『世界童話』

宗教童話も、ギリシア神話、イソップ

想皮袋、支那（佐藤春夫）印度

も含む。吉原を除めアーティスト

（高倉輝）

日本文芸童話集上中下三冊に直哉以下

日本上（藤村）中（未）

現代の作家、寛ははしがきに「文芸家

さつき高明）下（与志雄、楠山

の童話はその筆致等に於いて、普通の

大星半蔵、正雄、雨雀、広介、浩

童話よりも豊かな芸術味を湛へてゐる

大星半蔵、正雄、雨雀、広介、浩

ことを感じてゐる。児童が将来日本

（一九一二、三重吉）の八冊

ことを信じてゐる。

児童劇集上（逍遙）下 寛編で一冊、仲本貞一「教育映画物語」

（久保田万太郎、長田

秀雄、雨雀）

「日本歴史物語」上（喜

田貞吉）中（平泉澄）

下（中村孝也）

「日本建国童話」「日本歴史物語」上中下「ギリシア神話」ら童話として處理し、今井登志喜「外国歴史物

「西洋歴史物語」上（村

川堅固）中（大類伸）

下（斎藤清太郎）

「東洋歴史物語」（藤田

豊八）

「神話伝説」日本（柳田

國男）世界（松村武雄）

計九冊

日本近代文学大事典に収められた両者の目次によって分けてみた。他の分野で『海の科学』や『山の科学』『博物館』『子供の実験室』があると、『全集』側には『児童物理學』『子供天文学』『子供動物学』ありで、優劣は付け難い。それに寛側でも専門の学者に執筆を依頼しているのだから同じ条件である。

ただ『文庫』が現代一流の筆者に懇請して信頼すべき文庫（第二の国定教科書）にしようし、各方面の権威に頼った。これは鈴木三重吉

が『赤い鳥』を創刊する気持ちと同様である。『全集』側は「『小学童話讀本』を編輯して好評噴々たる菊池寛先生に配するに、作家中第一の博学たる芥川龍之介先生」をあて、全責任を以て編集することを重点にした。二人の流行作家の実績と人気を頼つてのことである。いわば実力でこいというわけ、標的を大衆に置き、その子供の心を把えようとした。

その一つの現れは実用面である。『文庫』の方は“模範”“理想”に執られて高級にすぎた。活用し得るのは小学生でも高学年ではなかつたか。寛の側は初級用三十冊と上級用五十冊に分けた。『幼年童話』①②はもとよりイソップ③—グリム④—アンデルセン⑤—日本建国童話⑥と生長に従つてのカリキュラムが組まれているほかに『児童漫畫集』⑦（岡本一平編）『漫畫繪本物語』⑧『オモシロエホン』⑨『古今東西乗物繪本』⑩『動植物繪本』⑪『虫の繪物語』⑫など繪本まで入っている。『修養繪本』⑬や『小学趣味讀本』⑭に『面白文庫』⑮など、遊びの要素や“楽しみ”の素が加えられないと推測される。『文庫』にはそのような雰囲気はなく、三大特典として『自習辭典』と月一回発行する『學習新聞』を無代進呈するとした。あくまで、よい子を望む中流以上の教育熱心な家庭を目標にしている。

第二に子供の実情に精しいことへの自信だろう。前節とも関連しているのだが、『文庫』は大人の目で子供を見ている。『全集』の特色を挙げた文中に、児童らは「歴史学者の歴史讀本には飽きあきして居ります」という大胆な発言がある。もちろん『文庫』を意識しての言

葉だ。「能く歴史に通じ、児童の心を理解した文豪の手に成って、初めて真に児童を悦ばせ、有益となるものであります」寛の子供の理解と準備は十分だの強い自信と自负を宣言したものだろう。それが『小学童話讀本』の延長であることは間違いない、外国の名作の翻訳、古典の戦記物の口語訳を含めて文芸色の濃いものにし、あまたの巻々に寛編と名を誌す結果になる。

第三には世相人心の流れを知つていて編集に採用した点。まず、日本を近代化し、五強国に仲間入りを果たし、國民が尊崇してやまない明治天皇の伝記と御製謹解が一戸兵衛の執筆で『明治大帝』<sup>(39)</sup>に入つた。「はしがき」に寛は「中興の祖にして、古今に絶した英主にあらせられた明治大帝の御一代記を、現明治神宮宮司で、大帝御在世中には側近に奉仕したことのある陸軍大将一戸兵衛閣下が、特に本全集の為に御執筆下さったことは、私達の光榮とし、また欣びとする所であります」と述べている。『文庫』も『全集』も「澄宮殿下、東久邇宮家、北白川宮家より畏き御予約の光榮を拜せる」と広告に大きく掲げた時代である。『全集』には海軍中将で文名高い小笠原長生が、国民的英雄の『乃木將軍と東郷元帥』<sup>(79)</sup>を、戦記文学の白眉『肉弾』の作者・桜井忠温大佐が『陸軍と陸戦の話』<sup>(50)</sup>を、藤井謙介海軍少将は、『海軍と海戦の話』<sup>(51)</sup>、長岡外史陸軍中将らが『飛行機の話・潜水艦の話』<sup>(80)</sup>というように軍人が執筆して、少年の血を沸かせるような編集である。『文庫』方には軍人の起用ではなく、アカデミック一色である。例えば明治の国運隆盛期を中村孝也『明治から大正へ』と歴史的

に物語り、海外に目を向けるにしても『世界の旅』（田中啓爾）『隣りの国々』（内田寛一）『日本と世界』（鶴見祐輔）といった編集である。

なお『全集』側が掲げたモットーとして「小学生の知能啓発の為」「小学生を完全に教化する為」「楽しく遊ばしめる」「趣味を善導する」「小学校教育を促進させる為」の五項をあげる。『文庫』がマンガ入りで児童相手の広告（東京日日5・21）では「皆さんの知恵の庫です。これさへあれば何でも詳しく分かります。…じつとしてゐて世界の旅も出来ます。こんな面白い本はどこにもありません。素敵に美しい本です。日本中の児童諸君が「万歳！万歳！」で大変な評判です」とあるが、生真面目さはどうしようもなかつた。

### 〔三〕宣伝戦は白熱

予約締切が近づくと新聞広告が激増する。同じような品物で競争するのだから、掲載する間が短くなつて、昨日の今日もと連日になるときも、全頁から見開き二面いっぱいに使つたり、両者の興奮ぶりが手に取るように解る。アイディアの戦いでもあった。コマーシャルソンが生まれるのもこの時だという。アルスは白秋が「チューリップ兵隊と日本児童文庫」を作詞した。「…チューリップ兵隊、そら、進め飛び越せ、お一二と、この島／向ふの小山の旗のぼり／アルスと書いたが讀めないか」

『全集』側も西条八十作詞で対抗した。「雀と鳥と私」（小学生全集の歌）である。

「雀の「いろは」はチューッチューッでせう。／鳥の「いろは」はカア

と付記がある。

カアでせう。／雀も鳥も小学生。／わたしも元気な小学生。……雀は麦の穂を食べてます。／鳥は榧の実食べてます。／子供は読みます、朝夕に。／きれいな小学生全集！」

広告合戦は本稿の主題でないので、表にして末尾に付録にする。

それより先、『全集』の共同出版社である『文芸春秋』は五月号で一頁で内容を、六月号では「推薦の辞」四頁と広告一〇・五頁を巻末に載せるとともに、寛が随筆欄に「小学生全集について」を掲載する。六月には「編集後記」に「興文社と文芸春秋社とで損得を超してやっている仕事である。本誌の読者諸君も、出来るだけ声援していただきたい」と述べている。これに対してアルスの方は『赤い鳥』六月号に二頁の広告がある。

寛側は五月十三日付に「記念奨学資金提供」とだけ予告し、同十五日には「此全集に予約して置けば毎月一万八千円の奨学金を得らるる特典があります」「此全集に予約することは皆さんのお友達の中で学資のない方を救ふことになります」と活字が躍るような、寛、龍之介連名の謹告が出る。またこの両日の広告には、『推讃』として「貴重なる全集」内閣総理大臣、陸軍大将、男爵・田中義一、「家庭訓化の好資料」文部大臣・三土忠造が載った。

奨学資金の内容は昭和三年度から三年間、予約した小学生の中から毎年最低百五十名を選抜して月十円宛年百二十円を奨学金として郵便局から払わせるもの。詳細な規定は目下文部当局と相談中だから近日発表する

この広告は『文庫』側に大きな危機感を与えたようだ。十五日にはこれに対抗するように前文相鎌田栄吉、前同次官赤司鷹一郎、松浦鎮次郎らを「日本児童文庫の刊行を賛助す」の広告に載せるとともに、山本鼎は三土文相に面会している。文相に『文庫』の推薦を求めたのである。その時、文相はその場で断つた。山本は各新聞に掲載された『全集』を推薦する文相談を見せたところ「僕は全然知らぬよ」と答えたという。これが文相推薦文偽造問題が起る発端であり、一万八千円の奨学金でも「文部省と相談中であるが」と確かめると「何の相談もない」ことが分るのである。ここでアルス側は五月二十日、興文社の石川寅吉と文芸春秋社の菊池寛を「信用毀損妨害」で告訴するとともに、菊池寛の人身攻撃の大キャンペーンを開く。

新聞は二十一日付で「遂に裁判沙汰／流行の全集もの」と大きく報道する。アルスの言分は、一、アルス側が文庫発行に際し広告方法を博文堂と打ち合せ中、たまたま興文社の者がいて、機密中の機密である出版予定計画書を巧みに入手し、これを利用して全集の計画を突如発表した。別の記事を総合すると、芥川龍之介が、その計画書を手に寛と石川が相談しているのを見たとアルスの二社員に語った。芥川の喚問を要求する、（朝日）とあり、アルスの計画に日本小学生全集の名を冠しただけの盗用だと主張する。

二、二、三十万円の予約募集広告を全国の新聞雑誌に掲上するに際し頗る巧妙なる舞文を以て盛んに虚偽の風説を流布し告訴人の信用と文庫の

価値とを毀損ひぼうした。

三、殊に三土文相（田中首相その他も同一ならん）の小学生全集推薦文書を偽造し、偽計を以て文相の推薦なき日本児童文庫が小学生全集より劣位にあることを発表した。の三点である。告訴された寛は日日の紙上では「プランとは何か。どの出版社でも思いつく計画であり、文相の推薦文も某氏の手から三土さんにお願いした確証がある。宣伝に負けて苦しまぎれに泥をぶつけてくるのですね」と「名譽毀損で反訴も辞せず」と語っている。

二十五日東京朝日九面全頁を使って「満天下の正義に訴ふ」を十段の見出しにした広告が出る。北原白秋と山本鼎の署名である。東京日日は六面、上三段に連載小説があるので、見出しは九段、何号活字と呼ぶのか、一辺四センチ強の活字である。「私は怒ったのです。私は叫ぶ。私は熱涙滂沱としてゐるのだ」「菊池寛何者であります。やがては来るべき天譴は下る」と激越な攻撃に全頁を使っている。朝日は全文掲載されているが、日日では十五ヶ所、約五十四行（行十六字）の字を伏せている。人名と激しい個人攻撃の場だ。また日日には強調する語句の右に、・○が打たれている。山本の文は、口調は静かに三土文相との会見を誌しているが、白秋の訴えは次の四点にまとめられる。

〔一〕『文庫』の目録は弟鉄雄が土田杏村の案を基に種々の検討を加えた「作品」であり「芸術」だ。「この必死の創作を冒され」た。  
〔二〕私は漸くにして三冊の編著と、他の一冊の共著を負担……そ

れすら重任……（日日伏字IIかの菊池寛のごとく「小学生全集」）八十卷のうち三十二冊の編著と八巻の共著を為し得ますか。

〔三〕菊池寛、芥川龍之介の責任編集と大書し……現在文壇の統帥者として過褒し誇示：かの種々の営利言と俗情とは何とまた観るべきでありませうか。：商業道德を無視し、出版精神を蹂躪し。  
〔四〕（日日伏字II）しかもまた、文相の推薦文を偽造し、一万八千円の奨学資金提供の美名を借り、恣にもこの日本全国の父兄の射撃心を夢み、天真にして本来思無邪の児童を勧誘して利を以て予約応募者の名を数えしむるがごとき、この大胆、この暴悪、この冒瀆を何としますか。何が児童への愛でありますか。……

これは矯激な意見広告である。白秋は口を極めて寛を陥しめ罵倒する。人身と編集法を攻撃し、同時に「日本児童文庫」の優位を主張する宣伝になっている。さらに告訴したことの正当さを印象づけ、訴えられること即悪者と思ひがちな大衆をも計算している。

私は天下の児童を愛します。さうして弟を愛します。

私は人間であり、ありたいのです。

絶叫的、大時代的に、しかも見栄たっぷりに宣言して、この文を結んでいる。この広告は『全集』に大きな痛手を与えたことは事実だろう。しかし『文庫』側にとつてどれ程の効果があつただろうか疑問に思つ。『全集』側では、この二十五日には第一回配本の『小公子』が出来、全国書店へ送本が始まっていた。予約締切の六月十五日も迫つてゐる。白秋にこんなに『文教の蹂躪者』と宣言されてそのまま黙るわけには

いかない。

『全集』側の反論広告は二十八日に出た。東京朝日も日日も六・七面見開きの大広告、白秋の倍の広さである。国民、報知、新愛知なども同様であろう。上四段を二頁通して「待て！而して見よ／満天下の正義をして苦笑せしむる勿れ」が菊池寛の署名。さらに「唯だ黙殺のみ」が興文社・文芸春秋社連名である。下二頁の八段分は「第一回配本『小公子』が出来ました」など内容広告である。

反論はやんわり語りはじめられる。

自分に就て、(日日〇字=北原白秋)氏が、いろいろ云つて居られる。

(日日〇字=北原)氏の如き、天馬にも比すべき芸術家が、御令弟の出版事業に熱狂して自分に喰つてかかるることは、非常に氣の毒です。だが、いくら御令弟の出版事業の敵だからと云つて、自分を悪罵するが如きは、やはり過ぎでせう。

と。そして、自分は先に『小学童話讀本』八巻を一年余を費して、編集した。今度のような全集編集に不適任者は考えない。文芸春秋社はその後も新しい童話集編集に備えて編集員を常置し、一二、三年来集めた少年少女讀物の文庫があるから、いつでも御覽に入れる。今度の出版計画は今年の一月頃から始めたものだと説明した上で、白秋の非難〔一〕について「廉価全集全盛の昨今、かうした思付は御令弟が考へつくごとく、興文社が考へつくのは当然ぢやありませんか。いな恐らく、大抵の出版書肆は考へついてゐるでせう。それを、御令弟独りの創意呼ばはりは、識者が聞いたら笑ふでせう」といなし、世界少

年少女文学の精粹を廉く頒つことの愉快さ、『明治大帝』『乃木將軍

と東郷元帥』など健全な讀物を入れ、一番讀物を欲しがる一、二年生を重視したのも「童話讀本」の貴重な体験からだと説明する。

非難の〔二〕については「僕が分担してゐる書目が多すぎるなど、

いらない心配ではありませんか」という。問題はよき編集助手であり、文名だけあっても少年少女の実情に疎い連中には委せられない。一人の手で精神的、文句文章を統一した方が安心だ。「一言一句の末まで、僕は責任を持つべくならない心配をするよりも、出来上った仕事を批評して下さい」とい切る。

非難の〔三〕は責任編集などと思い上つて出版道德を躊躇するという点には「若し『小学生全集』の編集なり刊行なりに不満があつた場合は、僕と芥川とを責めて下さい。ちゃんと編集責任者があることは、『小学生全集』的一大美点です。一つの営利団体である書肆が編集して、編輯顧問とか編輯協議会とか空名を連ねたものと、僕と芥川とが、全身をこめて編輯してゐる物とが、根本的にどんな差異を示すか」僕が生きている限りは、きっと立派なものを完成してみせる。実物について比較してください、という。また営利の点では「此方の方だけが奉仕的な仕事などと都合のいいことを云ふのは止して下さい。僕一個としては、報酬の契約など全然なし」「菊判三百頁の本を三十五銭に売つて、多くの利益がある筈がないではありませんか。この仕事の重大な意義と快味を感じてやってゐる」と打ち返し、さらに

『小学生全集』が五百萬一千萬も売れゝば、日本の文明は、一時に二三

段も飛躍すると思ふと可なり愉快なからです。

正義とか芸術とか文教とか、そんな高飛車な物云ひを、あんな時にするものではありません。少なくとも一商人である令弟を防禦するときに使ふべき言葉ではないでせう。

そして大方の諸君へとして

今後も、いろいろな悪口雜言を擅にすることでせう。だが、僕はこれ以上一言も云わないつもりです。そんな暇があれば編集の方に割当てるのが当然です。若し第三者の中我々の言葉を疑ふものがあれば、大戦中の英國の如く「待て！而して見よ」と、云ひます。で筆を止めている。

（四）の非難には両社の声明の形式で答える。

若し夫れ文相推薦文云々に就ては他の田中首相、高橋藏相、中橋商相、小川鉄相、若槻前首相、床次総裁、後藤子爵から悉く立派な承認を受けて居りますのに、独り三土文相に限つて何故に未承認のものを発表すると言ふ如き大胆不敵な行為を敢てするものがありますか。

に止め、「…みにくい、いがみ合ひは、かうした少年少女相手の出版事業に就ては、極力避けたい」と思つてきた。しかし「相手を傷つけ、相手を陥れんとしてあらゆる術策を弄し、甚しきに至つては訴ふるが如き非常手段をやつてゐる者と、いづれが本当に正しき事業をやつてゐるかは識者の御判断を待つまでもないでせう」「唯黙殺するのみであります」だ。（又論正義論二十八日付東京朝日新聞六・十一六月に入る。この問題については両社名で寛は洗いざらい真相をぶ

ちまげる、報知では四日というが、手元にある朝日では七日付の五面全頁である。「正しき者常に正し／「文相推薦文」に関する讒誣を粉碎す。」である。

該推薦文は、五月初旬〇〇新聞記者三〇〇〇氏が文相官邸に於いて文相と会見し、承認を得たものであります。

ト。仲介者に迷惑がかかるので今まで隱忍自重してきた。文相は多忙を極めて居た。三〇記者は文相と余り懇親なため秘書官の手など経なかつたので、文相は記憶せず、証拠もなく行き違いを生じた。文相は「三〇君は虚言をいふ様な人でないから事実であったかも知れぬ」と認めたという。（こちらで用意した文案を見せて廊下で立話のうちに承認を得たという。役所の慣例に従つてはいるが、軽々しく行われ誉められたことではないが）「万事が此の通りです。興文社と芸春秋社とが名を連ねてやつてゐる仕事に間違いのある道理はありません。どうぞ御安心下さい。」實に「小学生全集」万歳！万々歳ではありますか。」で結ばれている。

○これに対して予約締切を十七日まで延ばした「文庫」側は九日付で四段広告する。「菊池寛君に云ふ／山本鼎」である。

貴君の…弁証は、若し世間がそのまま信じるとした時、僕が白秋と共に全国新聞に発表した声明書がすべて虚妄の言となります。…もう、いいかげんにああした無理な抗争はよして、戦を製作本位に戻したらどうですか。

といわしめる。しかし、といつて長野県学務部長が小学校長に出した

「児童讀物購讀方勧誘ニ関シ注意ノ件」なる公文書（五月二三日付）を転載した。文部省から全国に通達されたものだが、

新聞広告中或ハ文部当局ノ推讚文ナルモノヲ掲ケ或ハ奨學金ノ分与等ニ

関シ文部省ト聯絡アルカノ如ク記載シテ：誘フモノアルヤニ認メラルルモ

右ハ文部省ノ全ク閲知セサル所ニシテ：

云々があり、『全集』にはすべて後の祭、既に手遅れであった。

#### 四 壮大な昭和の二記念塔

うんざりさせられるような泥仕合であった。児童不在の醜い大人の争いは、熱狂した当事者は大局を見失わせるが、いずれにも良い結果をもたらさなかつたことは確かである。文相推薦文の件でも仲介に新聞記者を立てたことも不用意である。出版社が出向いて企画を説明し

て承認を得るのが筋である。寛は「口頭の承諾だけで署名を貰はなかつたことは此方として取り返しのつかない手落ちだつたとい、また奨学資金の広告について目下文部当局と交渉中と云う文句を書いたのは、興文社の宣伝係のヨタである。：「追つて文部当局と交渉の上」と云へば、何でもないのであるが、そこをヨタるからいけない」（『文芸春秋』7月号）と残念がつた。

思つに「全集」側の企画を実行に移す段階での立遅れは明らかである。寛が挙げるによると、講談社、聚芳閣などに同様計画があり、昨年（大正十五年）には盛林堂書店が「児童文庫」の名で、十二冊の文庫を出版したという。「小学童話讀本」を編集した寛は統いて「新小学童話讀本」を編集する予定で準備していた。それは「自分の蒐め

た小学生の読物は、その何分の一しか収めることができなかつた。そ

して、完全なる小学生讀物は、可なりの大部数を要することが分つた」

（「文芸春秋」5月号）と大事業であることを悟つていた。また歴史的大事件を童話風に書きたい希望もあつた。「今度『小学童話讀本』

の出版元興文社から相談を受けて、自分は、全力を以て、その編輯に当ることを決心した」（前5月号）ことに偽はない。興文社と組むこ

とは渡りに舟であった。それに一度、アルスが児童文庫七十冊で児童文化の総合集大成的な事業を完成した後では、後発のものはすべて模倣であり意義は薄れる。アルスの計画を聞いた時、次に機会はない。今こそと振い立つたと思われる。それゆえに寛には、この壮大な仕事が“愉快”だった。

『文芸春秋』六月号（五月下旬発売）で原価計算を公表し「広告費は五十万円以上を投じる予定だ：しかし予約者が五十万に達しないときは恐らく何十万円と云ふ損失だらう」とい、「一世一代の仕事」だからと理解と声援を求めていた。さらに奨学金の企画について「僕がこの編輯から得る報酬の一部を割く心算であり、「ある程度以上の予約者がなく仕事が失敗に了るやうであつたら一錢の報酬もとらない」「仕事そのものの壮大さと重大さのために、働いてゐる」と張り切つてゐる。これらの発言にウソはないようと思われる。

『小学生全集』は昭和四年十月完結する。別巻を加えて八十八冊の大部になつた。『日本児童文庫』の方も七十六冊、昭和五年十一月ま

でかかっている。共に大事業であった。昭和初頭に輝く児童のための金字塔である。今の時勢から思うと、これからもこのような良心的で、周到、完璧な児童文庫は出現しないのではなかろうか。それにしても、

お互いに相手を褒めあって、いざれも百万部（正確な予約数・収支について小生未詳）程度の予約があつたらどんなに良かったかと思う。すでに過ぎ去ったことだが、夢みるのである。また明治人のあのうな激しい熱情がなかつたら完成しなかつたかもとも。一方は教養主義の上品で高級な良い子ぶり、片や活気にあふれ大衆的で手軽な新書版型（菊判だけれど）で並び立っている。昭和の児童文化史上の偉業として輝いている。

### 波紋 その一 芥川龍之介

芥川龍之介は菊池寛と並んで『小学生全集』の編集責任者に名を列ねた。寛は芥川に実際の仕事の上で負担をかける気持はなかった。しかし『全集』の宣伝の上では芥川の文名・人気は絶対に必要であり、責任編集というの云は、全集側広告の目玉であった。アルスが五月、寛らを告訴した時の新聞記事には、芥川が寛はアルスの企画書を手にして興文社の石川宣治社長と相談しているのを目撃したとアルスの社員に語つたとあり、アルス側の有力な証人とあげられている。

実はアルスの『日本児童文庫』では芥川に『支那童話集』を書かす企画があつた。その執筆の交渉に当たつたのが佐藤春夫であった。春夫も『支

那詩集』を書くことになつて、話を具体化するため春夫が芥川宅を訪れたのは春の初めごろ（確かな日付はない）だったという。アルスの社員が帰つたあと、芥川は春夫につぎのように語つた。

「ちょっと君に聞いて置いて貰い度いことがあるが、友達として相談するがね。実は菊池がアルスと似たような、と云つてまるで同じでもないようだが、ともかくもまあ少年物のシリーズを作ろうと云うので僕も編集者の名を列ねることになつていて。所で今アルスの話だが本来なら僕は引き受けない方がいいのかも知れんが、君も知つての通りアルスは僕に取つては最初に『羅生門』を出してくれた関係もあり、今まで頼まられるだけのことは何一つ断らなかつたのだ。今度もどうも断り度くないのでこの点を君含んで置いてくれと。何れは同じものではないんだから差支はないと思うが後になって君がへんに思わんとは限らんからね。」

### （昭和3・6「芥川龍之介を憶う」）

つまり、菊池の方にも同じ様な計画があり、既に編集者に決まつていて。それにアルスの方も断りたくないでの執筆は承知するが、後日、君が誤解すると困るので含んでおいてくれというのである。文庫側の予告では、十三巻『支那民話集』芥川龍之介先生・佐藤春夫先生と名を並べている。この年七月二十四日の芥川の自殺によつて、この計画は実現しない。最終的には春夫ひとりが執筆した『支那童話集』となつて昭和四年一月配本される。芥川の自殺の原因は、別のところにあつたが、その一因になつたのではとの説が流布されるのも、こんなところに由つている。

小学生全集と日本児童文庫で閲ぎあつたアルスが大きな花束を贈つてゐるのが目をひいた。多数の参集者にまじつて北原白秋、山本鼎の両氏もきてゐるのだ。

とある。（森本修「死とその前後」による）

波紋 その二 告訴など

五月二十日アルスが提起した「信用毀損業務妨害」の告訴をジャーナリズムは、予約出版泥仕合事件を稱した。同三十日東京地方裁判所検事局の山之（朝日、他にも又、欠も）井検事はアルス側からまず事情を聴取した。六月二十五日には興文社石川寅治が召喚され、七月十四日には菊池寛が呼ばれた。この頃になると出版業界に、仲間争いは不祥事、両者の和解調停をしようとの動きが出てき、東京・大阪の九書店主が委員となつて奔走し、アルスは無条件で告訴を取り上げることに傾いた。

寛の出版者ならどこの社、だつて思いつく企画との主張をはじめ、『文芸春秋』六月号では新潮社元社員の君塚勝彦が「北原鉄雄氏へ」を寄せ、「私が立案し、あなたが共同で出版しようと約束した『少年少女講座』の企画ではありませんか。私は独力で準備をすすめて来たが……、しかし大々的に児童に普及されたことは喜ばしい」の意味のことを述べ、アルスの背信ぶりを暴露した。アルス側も賞められたことばかりではなかった。決着後のことになるが、文庫の第二回配本の巖谷小波著『日本お伽噺集』は博文館の『日本昔話』からの無断採録などの理由で博文館から二万五千円の請

求訴訟を起こされ、倉庫の文庫を差し押さえられる事件も起きた。ともかくこの泥仕合事件は八月八日に不起訴の決定があり、幕を閉じた。

遂行してゐるわけですが、そのため経済的には殆んど利益はないのです。

…多くの方々の御希望に添ふことができないのは、まことに残念です。

そこで「五円宛でもよいから沢山の方に差し上げたい」と甲乙二組に分けて、向う一年間贈ることにした。詮衡について「お父さんが死なれて、お母さん一人で三四人の子供を学校へ通はせて居られる御家庭に、最も心を打たれました。：お父さんのない方を第一に詮衡しました。この詮衡の仕方にはどなたも異議がないと思ひます。その次は、兄妹が多くて御家庭の豊かでない方です。殊に、警察官の方とか小学校の教員の方とか、僧侶の方とか、公職にあつてしまつても困つて居られる方のお子さんも、特別に詮衡しました。」という。採らなかつたのは、一人っ子一両親の力でどうにかなる、月収百円以上の方—もつと下の方が外に沢山ある。それから、奨学資金である以上、「その本人の学業が素晴らしいといふことにも心が引かれました」と説明した。実に慎重な心配りをした語りかけであった。

そして「小学生全集」全八十八冊が完結し、最終の配本をするのは、この年の十月であった。

北原白秋が「満天下の正義に訴ふ」で菊池寛を攻撃した一眼目に出版事業における分業の問題がある。菊池寛のごとく「八十巻のうち三十二冊の編著と八冊の共著を為し得ますか」と個人の能力を越えるもので、その内容に責任が持てるかと問ひ、出版の良心に背くと非難したのである。その後これにヒントを得たか、大宅壯一が外国の思想叢書を翻訳するのに、仲間を集めて分業の流れ作業方式に組織化して有名になった。翻訳の工房化といってよい。寛はよき助手を得て、傑出せる一人の編著者が、言辞の端ばしにまで責任を持てば、文章でも思想でも統一がとれて、却て良く安心できると反論した。そして自分は一言一句の末まで責任を持つといい切つた。

『日本近代文学大事典』卷六に載せられた『小学生全集』総覧に依つて調べると、八十八巻中、（洋数字は巻号）。

菊池寛二  
27『日本世界偉人画伝』  
菊池寛著一  
7『日本童話集上』

註 結果は予期したほどではなかった。都会地では好成績だったが、地方では文部省の訓令が影響して非常に悪かった。しかし仕事を完成するだけの会員を得た。三十五銭の本で、送料に六銭八銭とかかり、書店が積極的でなかった地方もあり、「あまり安い本をこさえれるのも、全く考えもの」と寛は（昭2・8「文芸春秋」）報告している。

小やかに全部日本歌謡文庫で開き立ての天井大きめの東洋館にする  
芸術書引出アリヤ白井、山本龍之助も

共訳 二  
芥川龍之介と28『アリス物語』34『ピーター・パン』  
75『青い鳥』  
ン漂流記』75『青い鳥』

訳編 五 17・18『外国文芸童話集上下』26『黒馬物語・フランダースの犬』30『ホーマー物語』49『ジャングルブック』

菊池寛編二三 1・2『幼年童話集上下』3『イソップ童話集』5『アンデルセン童話集』6『日本建国童話集』8『日本童話集ト』

迷う未解。ち 9・10『世界童話集上下』11『宗教童話集』14・15・16『太平記物語』40『太閤記物語』42『太平記物語』43『源平盛衰記物語』

十『兵士大刀』中下』22『古今東西乗物絵本』37・38『日本偉人伝上下』

「」、夏 46『少年立志伝』少年少女美談』76『児童劇集』

菊池寛の名を冠した巻数は以上の四十六篇に上る。その他に執筆者

名記載なしが、44『西洋偉人伝』47『日本武勇談』の二冊ある。

アルス側が寛らを告訴する前に書かれた（すなわち弁解が入っていないと思われる）文芸春秋五・六月号の「『小学生全集』について

「同・（再び）」に依って観ると、『小学生全集』はさきの『小学童話讀本』の延長線上にあり、また次に予定していた『新小学童話讀本』

の構想を拡充整備したものであるといえる。『小学童話讀本』の準備に二年近く、更に『新一』のために一年半の歳月を費しているので、口三年半かけた計算になる。そして「あらゆる児童讀物に目を通してゐる自分は」という発言になり、「少年少女に関心が高まつた科学方面は当代一流の専門家に依頼し（要約）」となる。

自分は、文學者であるから、此の全集の中に、世界の少年少女文學の傑作は悉く集めることにした。

「クオレ」「小公子」「ジャングルブック」「家なき子」「ピーター・パン」などは面白いこと無類で、これをよむとよまないで、子供の性格や情操に差異が生じはしないかと思はれるほど、強い感銘を与へる。

文章「アラビアンナイト」「イソップ」「アンデルセン」「ロビンソンクルーソー」はいづれも童話の聖書である。

自分は少年時代、歴史的大事件を童話風にかいて見ようと思ふ。（以上五月号）

あらゆる方面的童話を蒐集してあるから、今回の「小学生全集」中

第一卷第二卷の「幼年童話集」出ちたり、藤原實謙著「」を出

第七一第十卷の「世界童話集」

第十四卷第十六卷「日本童話集」

は、精選された材料を持つてゐる。

その他自分の名を出したものは、材料の選択その他に力をつくしていいものをこしらえたいと思ってゐる。

「日本武勇談」二卷「日本剣客伝」一卷などは面白いものをかくつもりである。

翻訳類も、自分は自ら筆を取りて、小学生に分るやう自由な明快な訳をしたいと思ってゐる。（以上六月号）

右は『小学生全集』着手に当たつての寛の志と抱負である。また自分が書きたいものを特に書き出していることも留意しなければならぬ。実際に執筆した作品を探る手がかりになる。また書きたいと思つ

ても時間的余裕がなくて、下書きに出したのはどれで誰が担当したのであるか。いまでは曖昧になっている。しかし全般的に見て寛の名を出したものは、すべて文芸作品か歴史物であって専門を逸脱しているとは思えない。それに編著と名付けて、助手を起用したのは外国文学の翻訳であり、古典では口語訳であり、昔話は再話であり、純然たる創作物では見当たらないのである。それは別のジャンルを設けて『日本芸芸童話集』としたことで明らかである。この文芸家の手になる三巻のはしがきに

童話が、文学の一形式となつて以来、多くの作家は、童話の創作を試みた。文芸家の童話は、その気品その筆致等に於いて、普通の童話よりも豊かな芸術味を湛へてゐることを信じてゐる。日本文芸童話集は、児童が将来日本文学を味はふための文学入門として、本全集に三巻を割くことにしたのは当然だと思ってゐる。断片的著者と寛が一線を画していることでも明らかである。

しかし、寛と代作の問題はいろいろと取沙汰されている。大正九年十二月まで大阪毎日新聞、東京日日に連載された『真珠夫人』が大好評で一躍流行作家になった。通俗小説作家として作品は引張りダコの形で売れた。さらに文芸春秋を発行してからは、年少、かつ無名の作家志願者が寄せ集め、寛もよく面倒を見た。当時不況もあり、それら無名文士の生活救済の面もあつた。今では仲々真相がつかみにくいくらいのものが本当のところで、寛の厳重な監修を歴た作品というのがあり、寛の自作もあるというのが適当ではなかろうか。

没後の昭和二十四年、三十書房が寛の『日本児童名作選集・三人兄弟』を出すが、その編集者になるのが坪田譲治（一八九〇～）である。譲治は「菊池寛氏の童話集に、私があとがきを書くことがあろうとは、実に思いもそめぬことあります」と、二十三年ばかり昔の『小学生全集』発行当時のこと、少年に語りかける口調で述べる。

八十冊も本をつくるのですから、たくさん的人がそれを書く手伝いをしました。私も実はその手伝人のひとりでした。しかしそのころ、私はびんぼうで、そのうえに童話がへたで、今もへたですけれども、もっと、もっとへたで、だれも相手にしてくれませんでした。すると、菊池さんが、「源平盛衰記（ヨミ）」という本を子どもにわかるよう書いてくれ」と言われました。しかし今もいいましたように、びんぼうで、へたで、名まえの知られていない私のことです。その源平盛衰記には、私の名を出さないで、菊池寛編とだけ名が出されました。

しかし、なぜ私はこんなことを今さらここに書くのでしょうか。実はこの本にのつていてる「ロム・パルジャの少年哨兵」とその次の「難破船」と、それから「わが母いすこ」の三編であります。有名なアーミチスのクオレの訳でありますが、これは言うまでもなくりっぱな文章であります。また、それを取ってきた原本は小学生全集の一冊であります。ハッキリ菊池寛訳と書いてあります。その点すこしもそれを疑問にすることはないであります。しかしあの小学生全集の編集にはなん十人という、私のような手伝人がいたわけで、

これにもそのような人があつたかと思うし、あります。どの手伝いであつたかわかりませんが、菊池寛訳とあります以上、菊池さんが責任をもつて、きっと原文を照らし合わせられ、なつとくがいくまで自分の文章に直されたものと思われます。

つまり、この三つの作品は菊池さんの訳ではあります、助手のよう手伝つた人があつたろうということを、まず、ここにおこなうなりするわけであります。

四頁分のあとがきの半分を費した讓治は「そんな偉大な人がわずかに残された童話の中から、また選びに選んだもので、多くの人に愛読されんことを祈ります」と結んでいる。選びに選んでなおこの三篇を寛の作品と断定できないのであるか。

『小学生全集』に私は頼まれて源平盛衰記を書いた。それが菊池寛編となり、手伝人の名は出でていない。これら三篇は『小学生全集』から、この本に採録した。だから三篇は手伝人が書いたといえ三段論法は完成する。だが、そうでないから混乱してくる。はつきり菊池寛訳となつてゐるから疑問を差挿むところはないといながら、やはり手伝つた人があつたろうと類推せざるを得なかつた、いや讓治は助手があつたことを確信していると受け取れる。三話とも寛好みの健気な少年の話である。そして『小学生全集』の解説として讓治は編集者として責任ある態度をとろうとしたのだろうけれど、これら三篇は、その前の『小学童話讀本』に所載せず、讓治の誤解である。

讓治の再話というか、児童向け口語訳の「源平盛衰記」は昭和二年

九月の配本である。はしがきに寛は「なるべく、原本に忠実なやうに書いて見ました。面白い事件だけを物語風にかくことも一方法ですが、それでは結局今まで児童達に比較的よく知られてゐる物語を、更にくりかえすことになりますので、物語の全体にもれなく渡つて、源平両家が盛衰の有様を書いて見たのであります。だが、これが最善の方法であるかどうかは、諸君の批評に待たうと思つてゐます。」と助手の存在を匂わす発言はない。古典のうち何を採用するとか、「原本に忠実に」という方針はどこで決まつたのであろうか。文庫側には全く同名の書が三十五巻にあり筆者は土田杏村。やはり同名の『太平記物語』は全集は菊池寛編、文庫は藤村作である。

註 管見では佐藤みどりが取材を頼まれ、それを連載中の小説風に整理して提出すると寛はそのまま採用した（「人間・菊池寛」）。また「少年日本武将合戦物語」の内容で憲兵隊に取り調べを受け、事実上の執筆者は安島健と判明した新聞記事（毎日・昭和13・11・10）がある。

### 教科書批判のこと

やはり「一生一代」の事業だったのか『小学生全集』のあと、菊池寛は、児童文学からは遠ざかったようである。また普通選舉第一回に立候補するなど社会的にも多忙であり、昭和六年に文芸春秋を株式化するとか、次々に新しい雑誌を出すとかの経営や文壇全体の地位向上

をはかる活動がふえている。著作権法の改正運動もその一つであり、その関連で文部省の態度に懐らず思つていていたことも引キガネでもあつたと見受けられる。敗戦に至るまで児童文学に拘る事績といえば、国語教科書の批判を相当に根強く持続的に行つたことが目立つてゐる。昭和六年の晚秋のころ、寛が朝食をとるその側で、小学校二年になら長男英樹が国語の予習で讀本を音読してゐた。

おじいさんが、この柿の木をついでいらっしゃる時、下男の太七がわらいながら、

「ごいんきよさま、そのお年でつぎ木をなさるのですか」  
と、いつたそうです。その時、おじいさんは、「孫へのこしてやるさ」と、おっしゃったということです。

寛はこれを聞きとがめる。同年十二月の「話の屑籠」に次のように書いている。

子孫のために、つぎ木をする心がけを教えたのだろうが、（どうせ、先が短いのにつぎ木をしてどうするのか）と云うような失礼千万な事を、しかも笑いながら云う下男が、世の中に居るだろうか。人の生死については、相手が老人であればあるほど、口にしないのが礼儀である。つぎ木の教訓？を書こうとして、こう云う非礼を無批判にかいてある文部省のデータメにおどろいた。

なお、男の子は、二三頁進んで行って、「麦まき」と云う歌をよんでいたが、（風にふかれてなま土ふんで）とある。なま土と云う

言葉も、生硬きわまる言葉である。しかも、おしまいに（やつとすんだと見上げる空に、あすも天氣か夕日が赤い）だつて、夕日は正午の太陽のように中空にかかっているものではないだろう。ことに、精励な農夫の子が、晩まで働いてゐるんだもの、夕日は山の端にかかる道理にかなつてゐる。子供が、一寸よんでいる裡に、こんな馬鹿なところが、二個所もあるとすると、文部省の教科書なるものが、どんなにヨタモノであるかが分かる。

(菊池寛文学全集第七卷二六頁)以下書名は略巻のみ)著作権の確立は大正十三年来、寛が強く主張してきたもので、念願の改正案が通つた年で、これに関連して五月発表した「教科書」の意見を受けた第二弾である。

五月号で寛はいう。文芸家の文章を勝手に採録改竄して商売し、いかに不当な利益を貪つてゐるか、教科書屋がその売りみに際して、贈賄的にいろいろの費用が要るからであると指摘し、「教育と云つたような国民全体の必要事を種にして、不当な利得をしている者を存在させるが如きは、いかに文部省など云うものが、グウダラであるかが分かるのである。文部省が、編集委員を設け（それも役員）人の誤植かの古手でなく、学者、文芸家等あらゆる種類の人を薦めなければ駄目だ）国語なら國語について五種乃至は十種の教科書を作り、これを官営で製造販売すれば……もつとも、文部省でやれば、今の小学校の教科書の如く、面白くもおかしくもないものが出来るかも知れないが、しかしそれは委員の

選定に依つて、どんなものでも出来ると思う（第八卷 三四七頁）

寛には、無造作で小事にかまわぬところがあつた。顔や歯を洗わず、風呂に入るのも嫌いとか、だらけた帯を引きずり歩いていても、注意されると嫌な顔をしたといわれる。飼犬も子育ても放任主義だったが、肝要のところは押さえていたのである。むしろ周到で神経質すぎる点を指摘する友人もいた。本質を見抜く鋭い眼を大まかな姿勢の陰に秘めていたようである。そして徹底して追及した。

接木の話の発見は我が意を得たものだつたらしい。鳩山文相の座談

会（昭7・3月「文芸春秋」）でも口にし、文相は教科書非難を理解したようだが、表に現われた反応はなかつた。「みんな同感らしいが……幾万の小学校の先生が、なぜ気がつかないのだろうか。不思議に思われてならない。気がついていても、文部省に対し非難するような自由がないのだろうか」と不思議がついている。（第七卷 三八頁）

次いで翌四月号の「話の肩籠」では、接木の話の起源が分かつたと二話をあげる。一は波斯の王が、胡桃の苗を植える白髪の翁に逢う。「実のなるまでは生きていられまい」の王の問いに「私も生まれて前人の植えた胡桃の実を食べましたれば、その代りに新しい樹を植えて後人に残すのが道と考えます」と答えた話。いま一つは室鳩巣の駿台雜話中の將軍家光微行の時の話。家光が郊外の寺に立ち寄ると老僧が接木をしていた。「その年をして」と問うと老僧は「心なき事を云う人かな、後住の代になれば、この寺も黒みわたり風致がよくなる」と答えた話。寛は教科書は「多分この家光の話の改作であろう。そして、

頭の悪い改作者は、將軍家光を下男の太七にしたのはいいが、言葉だけは將軍らしい威儀を以て、「その年をして」となつてしまつた」と笑い、自分の改作例を示している。この後、韻文の拙さ、装幀の汚らしさ、定価の高いことをあげ「むしろ民間に委ねた方がいい」という。

昭和八年小学校の国語教科書は「ハナ ハト マメ マス」から、「サイタ サイタ サクラガ」に代わる。この新しい教科書についての批評を寛は「東京朝日」の学芸欄に書く。（引用は昭和12「新道徳讀本」から）

「從来のものに比べて数等勝つてゐるものである事は、私も十分認めゐる」「しかし一見してみると、今迄の教科書に対する腹立たしさがぬけきらないのである。教科書の文章を読んで居るといつでも不愉快になる。それは、悪文に対する腹立しさだ。タワイもない短文であるから、どこがまずいとは、ハッキリ言へないが、しかし我々文章を以て衣食してゐる人間には、悪文の感じだけは、ハッキリ分つて、無性に腹が立つてくる」という。挿絵に触れ、表紙に触れ、「子供の生活感情と何の関係もない、きくらげのやうな雲」、「ほうわう」などをなぜつける。」と問い合わせ、役人の様な大人が見たら小学校の教科書だという気がするだろうとけなして、結論では持論の、有識者を挙つて編集委員会を設ける制度の刷新を強く要望する。一国の精神文化の礎石を築く事業を文部省の小役人に委すべきではないと強調するのである。

第一の特色は、「単語から始まらないで、すぐ文章から始まつてゐる

点である。この方がずっとよろしい」といって頁を追つて批評に入っている。

「一番気持ちよく読めたのは『メダカサン』といふ文章であるが、後で聴くと児童の作品に手を入れたものださうである」「巻中唯一の文学的文章で、監修官の書いた文章に比べては、玉のやうに光つてゐる。さすがに、どこかの小学児童がかいただけある」「玩具の電話問答は、好個の文章で、いかにも小学讀本らしくてよい」「四十六ペジの、一バンボシミツケタは、古い讀本もあるが、一番無難である」と。つまり子供の生活感情にぴったりと触れあう、同感を呼ぶものでなければ児童の讀本といえない。未熟な監修官などが、おそれ氣もなく、児童のための文章を書くなど以ての外という気持ちでの批判である。

ヒカウキ ヒカウキ

アヲイソラニ、ギンノツバサ

ヒカウキ ハヤイナ

といふのであるが、アヲイソラニ、ギンノツバサと云へば、その後は、

ウツクシイといった方が、より自然のやうな氣がするし、ハヤイナと言ふよりは「ハヤイ、ハヤイ」とつづけた方が、ヒカウキの速さを現

わしてよいと思ふである」……「その次の

プウトフクレルシャボンダマ  
クルクルマハル、アカガデル  
クルクルマハル、アヲガデル

フ哈利トイテ、ドコヘイク  
カゼニユラレテ、パットキエタ

一体、これは何だろう。監修官の文学的無教養と頭の悪さをハッキリ見せた童謡である。教科書以外には、こんなまづい平俗な童謡は絶対に見られないだろう。

しかし、まづいだけならよいが、シャボンダマの色を赤と青とに片づけてゐるあたり、野蛮人程度の色彩感覺しかなく、最初一讀した時、シャボンの溶液に、赤の出るのと青の出るのと二種類あるのかしらと、私は首をひねったのである」……。童謡、唱歌について文学性の欠如、またシャボン玉を赤、青の二色に片付ける乱暴な感覺——やはり詩人ならぬ大人のいい加減さを非難している。なお一年程後に「子供が大きな声で『スギノハイズコスギノハイズヤ』と歌うのを、何と云う云いまわしの下手クソな語呂のわるい文句だろうと思つていたら、小学校書にある庄瀬中佐の歌の文句だった。「杉野は居ずや」なんて、こんなまづい文句が、世の中にあるだらうか」(昭9・3「話の肩籠」第七卷一二一頁)ともいつてゐる。

童謡について「シタキリスズメの話など、どこが拙いとは云へないが、何だか讀んでると、はがゆくなるやうな文章である。」

桃太郎の話、「古い讀本にある桃太郎の話が、そのまま使はれてゐる。日本で一番古い話ではあるが、仔細に考へると、あの話からどういう教訓が与えられるであらうか。子供に勇気と征服慾とを教へるだらうが、重複して出て来るダンゴ問答など、少しナンセンスではない

だらうか。しかし、ナンセンスがいいと云ふ説もあるかも知れないが、ダンゴをもらふからお供しようなど、甚だ功利的だともいへる。とにかく教科書が無条件に、全部を二十余頁にわたって採択するのは、知恵がなさすぎるやうだ。セイバツをタイジと訂したり、タイジの理由を説明したりしてあるが、書き方は古い讀本の方がずっと簡単でよい」「ただ鬼ヶ島の鬼の絵などが、へんに実感があつてグロテスクで汚らしい気がする。子供には、寧ろヘイタイスマの絵のやうな模様化されたものがよいのではないか」

「ウサギとカメ」の話は古い讀本にも、挿絵と一寸した説明があるが、新しい本にはくわしくのつてゐる。ウサギとカメの話は、子供が小さい時からみんな知つてしまふ話で、油断大敵を教へる話であらうが、亀が兎と競争して、かりに勝てるといふ事を子供に教へるのはどうだらうか。亀が兎と競争して勝った結果、亀が動物仲間で一番早いと云ふ話になる。山火事があつたとき、亀を使ひとして送つたため、森中の動物がみんな焼け死んだといふダンゼニイの寓話は、自分が一度引用したが、教訓的童話の中でも、すぐウソと気がつくものだけ大分長い引用になつた。児童の心に疑惑を起させはしないか」

「その死・その後」する。小学校全體をば見つ」ア、は國學やる  
昔話、兎話、櫻痴寓話、牛若童話など講義が、まさに人五心の御用十八

その死・その後

大體うその母(や)

死の直前に名作童話編集

おのちはうめり入るさ(同上)

昭和二十三年三月六日夕、患っていた胃腸病が治つたので、全快祝に主治医大堀素一郎らを招いて家族らとすしを食べたあと九時過ぎ、突然苦しみだし、同十五分息を引き取つた。狭心症であった。前年十二月七日には占領軍から公職追放の処分を受け、同三十日には横光利一の死に遭い、身辺寂寥を加えていたが、机上には原稿用紙を用意してままであつた。急な死去であつたが、遺書が用意されていた。それは知人讀者一般にあてられた寛の人柄の一面を表わすもので、東京毎日の記事では、「奇抜な一枚が秘められていた」と表現した。

私は、させる才分なくして、文名を成し、一生を大過なく暮らしました。多幸だったと思ひます。死去に際し、知友及び多年の讀者各位にあつくお礼申します。ただ國家の隆昌を祈るのみ。吉月吉

伝わる。教科書編集制度の改善を寛が提案して五十年、いまだに文部省審査の検定制度は残つてゐる。寛ではないが「そんな馬鹿々々しい話が世の中にあるか。実際教育の経験がなく、文学的教養もなく、といって編集の才能もなく、といって衆知を集めるほど雅量のない人間に、委して置くべきものではない」のことばに同感である。

私は、させる才分なくして、文名を成し、一生を大過なく暮らしました。多幸だったと思ひます。死去に際し、知友及び多年の讀者

同日の対談 菊池寛が、小説本を重読つてゐる房村さおり、機関誌

おふる家のもり（初出？「鶴の恩返し」昭18・7 新潮社）。吉田吉

また嗣子英樹への遺書には「母を大切にみてゆくこと」と並んで「孫のうちだれか文学をやってもらいたい」の一節があった。瑠美子、英樹、ナナコの三児があるが、英樹は東大工学部へ進んで鹿島組に入り土木屋になった。「残念ながら私達には一人もありませんが、孫の時代にでもなつたらあるいは」と記者の質問に答えた。それにしても

寛の文学への深い愛情と祈りを語っている。

さらに注目したいのは死去の直前に『日本名作童話』を編集していることである。発行元の主婦之友社から依頼があったのだろうが、寛もまた喜んで引き受けたのであろう。戦後の児童への最後の贈り物となつた。昭和二十三年五月二十日印刷、同二十五日発行である。一九八頁、定価八十円、装訂と挿絵、三芳悌吉。寛の序も後書きもないことが惜しまれる。

はちかずきひめ

松村武雄（一八八三～一九六九）

太郎とその母（？）

文正草紙 岩谷小波（一八七〇～一九三三）

から始まって

菊池寛は、うばすて山

三人兄弟（『赤い鳥』大8・456「日本文芸童話集中」）

恵みひちむら、八太郎のわし（『赤い鳥』大12・1「同右上」）

小川未明（一八八一～一九六一）十余歳のとき銀次郎の母、歌

その日から正直になつた話（『赤い鳥』昭2・10）もつくる。それ坪田譲治（一八九〇～）

善太と汽車（『赤い鳥』昭2・10）  
浜田広介（一八九三～一九七三）文芸多観（『赤い鳥』）

はえの目と花（童話集「はえの目と花」昭16 フタバ書房）

弓の名人（？）  
宇野浩二（一八九一～一九六一）ふくの山の花（『赤い鳥』大10・1）

宮沢賢治（一八九六～一九三三）ふきの下のかみさま（『赤い鳥』大10・1）  
新見南吉（一九一三～一九四三）手ぶくろを貰へまつた（『赤い鳥』大10・1）

手ぶくろを買ひに（「手をつなないだ椿の木」昭18・9）

花のき村とぬす人たち（同右）

斎藤謙太郎（？）

の十名、十五篇を集めている。小学生全般を対象として、お伽噺から昔話、民話、動物寓話、生活童話と広範囲な、また大正から昭和十八

年までの作品から選んでいる。寛の「うばすて山」は、信濃に年寄り嫌いの殿様がいて、七十才以上の老人は島流しにした。隣国から灰の繩をなえとか次々難題を持ちかけるが、孝行息子が隠していた老母の知恵で解決し、殿様も老人を大切にするよう改心したという話。この話は私も聞いた覚えがあるが寛の作とは知らなかつた。思案やうつ

また斎藤謙太郎とは、どういう人か、まだ分からぬ。太郎の母は

耳が遠い、働き疲れている。物忘れもひどい。残り御飯を干飯にするが、雀に食べられてしまう母である。太郎はたびたび糸ほぐしを手伝わされる。太郎はときどき自分の心に鬼がいると思う。この鬼はほうぼうに角を出して母に当たる。目に出でては見えないふり、耳に出でては聞こえないふりをし、口に出でては、話しかけない。手に出でては乱暴になる。しかし、この鬼はじきまた、つのを引込める。やりきれない少年の心を「いなか道」「耳の遠い母」「はし」「一里だま」「うたたね」「干飯」「おに」の短章に分けて描く。哀切な母と子の生活と心の交流、詩的な作品である。寛はどこから選んだかなど書いていない。他の作品はそれぞれ有名であり、諸社の文庫本にも収録されているものもあるが、寛の用意が偲ばれるのである。

なおこの本の終頁に、主婦之友社の『愛育図書』の広告があつて、アラビアンナイト 菊池寛編著「……原作中の粹五篇をとつて菊池先生が心魂を注いで血肉を与えた……これまでにない充実したアラビアンナイト！ぜひお子様に……」と、出ている。定価一〇〇円。

右らのことは還暦を迎えた寛が、再び児童文学への意欲を燃え上がらせていたかに思われる。遺書にある、子孫のうち誰か文学の後継者をと願った気持ちと相通ずる。秘め抑えてはいるが、文学への強い愛着があつたのだろう。

あるお支えさむじき、おもむろぬ君太のねむゆじだ。すみ

英樹お、

この未入「おもむろぬ君太のねむゆじ」の發言が繰り返されれば悔い？ 子には文学を教えず、豊かな感覚と玉養を受けるべきの眞実を見取らずを養ひ、文学の歴史を学んで、隠された豊かな感覚と玉養を受けるとはそれこそお祝詞サマでも予測できまい。」というわけだ。呟く「これも父の放任主義のせいです……」ご本人はアッサリいう。とある。続けて、「僕ほど自分の父を知らない人間はないと思うんです。まるで完璧な放任主義だったですからね。父の小説は何一つ読まず。死んでからやっと読むようになりました。」

といつた調子である。今鹿島組を退いて旧邸宅跡の菊池寛記念館の理事長だが、この事については聞きそびれている。

この英樹、書物の上で父を語ったことがある。それに依つて家庭での寛のことを述べよう。ポプラ社刊の『新日本少年少女文学全集13・菊池寛集』の中である。編集・解説をするのは田中豊太郎、出身を同じくする香川県人で、東京高師付属小学校で英樹の担任をした縁もあり、寛と面談もしたという関係である。包子未亡人と英樹と鼎談で父寛を語っている。ただ手にしている本は昭和三十八年六月三十日刊で六版である。奥付に初版の発行日を省いてあるので、いつ鼎談が行われたか明らかでない。この年なら英樹は四十歳に近いはずだが、いかにも幼っぽい語り口に表現されている。

包子未亡人が「ほんとうにいいおとうさまだつた」の発言に継いで英樹は、

まるで友だちのように、すきなことが言えたのはよかったです。子どもみたいなところもあって……とくに土曜日は「家庭デー」といつて僕たちをつれてごちそうに行つたことがたびたび……という風に語り、田中は逸話を混じえたり引き出したりして、寛の人物を讀者である少年の興味を引くように描く。英樹が語った父像や教訓を要約すると次のようにある。

遠足に行くとか何かほしがると貧乏時代のことを語つて「遠足や修学旅行というときが、一番ゆううつだったよ。友だちのうれしそうに行くのを、じっと家の中で見ていたんだよ」とよく言われた。また五山につながる先祖のことも。（寛が残した色紙「艱難汝を珠にし逸楽汝を瓦にす／父」がある）

○父はひじょうに勉強家だった。というより努力家。とにかく本を読む。原稿を書く。夜は遅くまで外にいていつ帰るのか知らない。それでも朝は早く起きて、食事前は家のなかをあちこち歩きまわっているといった調子。歴史ばかりでなく時事問題になつたことの材料をしらべる。例えば原子爆弾が落ちたというと、原子学に関する専門の本を何冊か買ってき、読むんです。そしてわからないことがあると、ぼくの大学の参考書まで貸せといつて調べる。本を読むのが早いし、事件のあつた地點の地理などもすぐ讀んでしまう。

児童が文芸によって、美しき感情と豊かな想像と正義を愛する心と物の眞実を見通す目を養い、文学に描かれる人間模様に学んで、誤

気持しがいいといつていて。しかし案外かたいところがあつて、僕に「健全な社会人になれ」とよくいっていた。

○父は合理主義者であり、いっぽうでは義侠心というか、親分はだであつた。

○父はずいぶん氣ままなところもありましたが、ちゃんと理屈はあるんです。

○犬も好きだったが、訓練した犬はいやだといつていた。自然にはうつておいても、人を見分けるような犬が、ほんとうはりこうなんだというのです（犬を二階に上げ小便が階下にしたたり落ちたり、応接間で客に出した紅茶を飲んだり）

○小さいときの躰は別として家庭に率直、正直、ありのままの生活、いわゆる型どおり礼儀作法や古い慣習にこだわらぬ自由さがあつて、飼われる犬にまで及んだということとか。そして自ら気づいて自ら律していくことを理想とし、型にはめる強制はなかつたのが、放任主義というのであろう。なお末娘ナナ子に与えた色紙には「十を知つて一を知るごとくせよ」とあり、人生に深く通じた達人が父として教訓で、興味深いものがある。『歌セラモテルモス』、「つづらひわざ」も出でる。『落合村』「やこすの・文獻の大図書・やまと木村藏書」など

戦後出版の本など

りなく眞の人生を美しく生きることは幸福である。文芸は人生の教師であり、指針である。子供らに、自分の少年時代に得た心躍る喜びを頒とうと念願したこの人は、簡潔で明快な文章で、健気に奮闘する勇氣ある少年を、希望を持って力強く生きる姿を、美しくひたむきな心を、少年のために描いた。またそうした話を、今古東西の物語から選び出して讀む楽しみを用意してくれた。激しい戦いに敗れた大人たちにとって、子供たちにかける期待は大きかった。大人たちが立ち直り、民主主義と平和に目標を見定めたとき、物にも文化にも欠乏を強いていた子供らに豊かな温かいものを誰しも与えたいと思った。菊池寛も同様であつたろう。が、天命がそれを許さなかつた。ただ遺された物が、つぎつぎと出版された。十分な資料ではないが、それを列記しておこう。

- 昭和23・5・25 菊池寛篇「日本名作童話集」主婦之友社||記述ずみ  
24・12・22 「日本童話名作選集7・三人兄弟」(坪田讓治あとがき)三十書房||一部記
- 「三人兄弟」「うばすて山」「落ちたかみなり」「くもになつた少女」「艦長の子」「八太郎のわし」「宮本武蔵と勇少年」「みかん船」「ロムバルジャの少年哨兵」「難破船」「わが母いすこ」
- 「赤い鳥童話名作集・三一四年用」に「一郎次・二郎次・三郎次」小峰書店
- 38・10 菊池寛篇「少年少女日本文学全集5・菊池寛篇」(ほかに芥
- 26・10 新潮文庫「赤い鳥傑作集」に「納豆合戦」

川龍之介、豊島与志雄）講談社

85・01 「三人兄弟」「納豆合戦」「恩讐の彼方に」「父帰る」

「蘭学事始」

40・2 「日本青春名作選19」学習研究社

40・9 「三人兄弟」あかね書房

40・10 「新日本児童文学選8・三人兄弟」偕成社

40・11 「ジュニア版日本文学名作選25・恩讐の彼方に」偕

成社

41・11 「少年少女新世文庫文学全集38・現代篇」に「三人兄

弟」講談社

42・11 「ジュニア小説シリーズ15」ポプラ社

右のうち実物を手にしていないものあることをさらに誌しておく。昭和も三十年代になって寛の作品は、少年少女向け、中学生向けと読者対象を拡げ、初期の純文学作品を収容するようになつた。筋がはつきりし、文章が簡潔で明快でわかりやすいのが受けるのであろう。なお参考のため戦前戦中の目についた単行本その他を掲げるが、坪田譲治の指摘にあるように純然たる菊池寛作品かどうか、疑問の存するものも含まれている。

昭和10・8 「少年少女教育講談全集1・春日局」講談社  
11・12 「少年少女教育講談全集3・毛利元就」

16 「新日本少年少女文庫第2編、海外に雄飛した人々」

新潮社 86・01 「日本文學全集2・藤原實淵」（新日本文庫）

86・01 戰後・没後

香川県図書館

86・01 藏、奥付破損

86・01 小学生全集31は菊池寛と明記、解説1-4のうち1は明らかに戦

86・01 後の付加、4の末尾に「故菊池寛先生が史実にのつとて書かれたもので、巷間に流布されているようなただ興味本位の粗悪な講

86・01 談本と相違することを付記しておきます。」とある。

86・01 「日本の偉人」東南書房

86・01 聖徳太子から伊藤博文まで「十八名」島の出来る話、出世、

86・01 「文部省」「宮本充蔵」、「香吉勝利」（群書の袖、天

86・01 「文部省」「宮本充蔵」、「香吉勝利」（群書の袖、天

86・01 「文部省」「宮本充蔵」、「香吉勝利」（群書の袖、天

〔4月〕 三葉の上段 小学生大会

西条八十の教

〔4月〕 三葉の上段 小学生大会

西条八十の教

アルス 二五 6・7 面

日付 文庫

（申込締切六月三日のち  
六月一七日まで延期）

全集（申込締切六月一五日）

興文社 一三 16面（二段）

半頁一段

権威三十三博士執筆、

〔5月〕 未開「日本童話叢」

5・5 半頁一段

澄宮、東久邇宮御予約、

アルス（日本児童文庫）六三

5・7 二段の1/2

少年少女大会案内（朝

5・7 二段の1/2

少年少女大会案内（神

アルスが興文社、  
宮宛）

5・21	半頁	マンガ入りで締切迫る 『三面に』人気沸騰、グラビア	見開き二頁 下内容、八十の詩も
5・22	全頁	「第一回配本決定」 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2	四段の景品五万、小学生全 五百万讀者に配布の
5・23	二段の約1/2	『日本童話集』(児童 劇集) 少年少女大会案内(報 知新聞講堂)	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
5・24	半頁	田中首相、小川鉄相 推薦文	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
5・25	二段の1/3	北原白秋・山本鼎 『満天下の正義に訴ふ』四頁 を付録(全集双六など) タツタ一冊35錢、製本	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
5・26	半頁	出来、全国書店へ 未明『日本童話集』	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
5・27	三段の1/2	『興文社』二三・三段 逍遙『児童劇集』	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
5・28	三段の2/3	『文藝』三段の1/2 少年少女大会	四段の1/3 知らせ。6月 六・七面 三段二頁に白秋へ反論
6・1	二段の1/3	北海道書店が応援 輝くばかりの大文庫、 明後日限	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
6・2	④全頁	一流の学者、芸術家が 執筆の大文庫、明日締切 東京一四四小校長が推薦 校長、教授らと平凡社 社長らの推薦文	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
6・3	④全頁	本日締切	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
6・4	二段	『しろがねも……』の 山上憶良の歌入り 「今晩締切」	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2
6・5	全頁	村の小学校、全員挙つ てアルスの児童文庫 感謝、果然!申込殺到 (電報の写真入り)十	四段の1/3 知らせ。6月 六段の『小学生大会』(日比谷 公園) 1/2

七日まで申込(延期)

受付

6・6

6・7 四段

「菊池寛君に云ふ」山

本鼎、長野県学務部長

通達を転載

6・10

三段

昭和初頭の二大壯觀  
(新八景選定募集と)

6・11

全頁

締切迫る、是非実物  
を見て

6・12 二段の $\frac{1}{4}$

御注意!!お申込は来る

①半頁

母性愛をもつお母様、  
最終の締切が近づく

6・13 二段の $\frac{1}{3}$  盲学校が点訳、盲の子

④三段

刊行記念音樂童謡舞  
の4弱 踊大会案内

6・14 三段の $\frac{1}{2}$  何故?配本後の申込み  
よ

十七日

最終の締切が近づく  
急げ、飛び込め、近  
くの書店へ!すべつ

6・15 二段の $\frac{3}{5}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・16 二段の $\frac{3}{5}$

二段の $\frac{1}{3}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・17 半頁

二段の $\frac{1}{3}$  何故?配本後の申込み  
激増

を一部変更

6・14 三段の $\frac{1}{2}$  比類なき特色を見られ  
よ

6・15 二段の $\frac{1}{3}$  一日一善、全集を申  
し込むことです。

6・16 二段の $\frac{1}{3}$  愈々明後日締ります

譏諷を粉碎す

6・17 全頁 「正しき者常に正し」

文相推薦文に関する

⑤全頁 明日締切

④半頁 家庭に大歓迎、名流  
十夫人の寄書

⑤全頁 明日締切

6・18

四段

急げ、飛び込め、近  
くの書店へ!すべつ

6・19

全頁

てもころんでも飛び  
こめ、急げ

6・20

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・21

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・22

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・23

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・24

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・25

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・26

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・27

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・28

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

6・29

二段の $\frac{1}{4}$

二段の $\frac{1}{4}$  何故?配本後の申込み  
激増

愈々に本日限り

高松短期大学研究紀要

第 12 号

昭和 57 年 3 月 1 日 印刷

昭和 57 年 3 月 10 日 発行

編集発行 高松短期大学  
〒761-01 高松市春日町 960

TEL (0878) 41-3255

印 刷 高東印刷株式会社  
高松市東山崎町 596 番地